



特集

新校舎整備工事着工!!

TOKYO2020 オリンピック・パラリンピック
新型コロナ禍における大学の対応（連載）

教育実習報告／講演会だより
文大だより／ぶんだい堂



新校舎整備工事着工!!

旧南都留合同庁舎の建物と土地を活用した新校舎整備工事が着工しました。



新校舎イメージムービー

<https://youtu.be/k99pvaGXRGU>



令和3年9月7日(火)には新校舎の工事安全祈願祭を行い、山下理事長、藤田学長をはじめ堀内富久都留市長など関係者約20名が出席しました。



2009年に「公立大学法人」に移行し、創立60年以上経つ都留文科大学は、『菁莪育才』を学訓に時代の変化に迅速に対応できる幅広い教養を備えた職業人、社会人の育成を行う「知の拠点」としての役割を担っています。この歴史を受け継ぎ、全国から学生が集う独自の特性・恵まれた自然環境・開学より温かな関係を築き上げてきた地域の人々とのつながりを大学運営に有効に生かしたキャンパス整備を行います。



新校舎は鉄筋コンクリート4階建て、総敷地面積は約10,000㎡、延べ床面積は約3,800㎡。学生と地域住民の交流拠点にもなるような計画で、1階には市民や学生が自由に出入りできるカフェを開設します。また、事前予約をすれば市民も利用できる多目的教室も設備します。3階には教員を目指す学生が教育実習の練習に利用できる模擬教室を設置するとともに、これまで1号館等にあった教職支援センターを移転し、教員養成大学としてのブランド力向上を目指します。



2階のカフェcommons（イメージ）。市民も活用できる利便性の高いスペースを設置します。



2階の多目的教室（イメージ）。その他3階の多目的教室には3Dプリンターなどのデジタル機器、工作機器を設置し、ものづくりの拠点となる空間を整備します。



3・4階のラーニングcommons（イメージ）。自学自習や学生間の交流、公開講座等を自由に行える共用スペースとして設置します。

聖火リレー

五輪が身近なものに

地域交流研究センター特任講師 佐野 夢加

2021年6月26日。私は聖火ランナーとして地元富士川町をかけた。

沿道には近所の方々が見に来てくれ、左を見て右を見て知っている顔ばかりだった。

まさに地元を走るといふ事はこういう事なんだと実感した。

自分自身がロンドン五輪に出場して目に焼き付けてきた聖火の火を、次世代へ繋げていく過程に関われるのは嬉しいと感慨深い。私が走ることで、五輪が身近なものに感じてもらえたらと願い、聖火を次へ繋げた。



▲トーチを持って走る佐野さん(地元富士川町にて)

TOKYO 2020の聖火ランナー

学校教育学科特任教授 柳 宏

1964年、東京五輪があり、当時12歳の元気少年は「オリンピックに出たい!」と思いました。中高はバレーボール部です。超進学校だったので競技レベルは低く関東大会にやっと出場しました。オリンピックの夢は諦めましたが、スポーツに関わる人生を選択し体育教員になりました。

今回 TOKYO 2020の聖火ランナーとなり、五輪に関わることが出来ました。幼い頃の夢がちょっぴり叶いました。聖火リレー楽しかったー!!



▲トーチを持って走る柳先生(西桂町国道にて)

東京2020オリンピック聖火リレーセレブレーション
コカ・コーラステージ

都留文科大学合唱団 団長 天童 虹

私たち都留文科大学合唱団は、6月27日(日)富士山パーキングで行われた「東京2020オリンピック聖火リレーセレブレーション」に出演してきました。

昨年度からご依頼をいただいておりますが、楽しみにしておりましたが、無念にもコロナウイルスが一変させてしまいました。今年度も状況がなかなか好転せず、オリンピックの開催が決まっても直前まで出演できるかどうか定かではありませんでしたし、私たち団員としても出演して良いのか何度も悩みました。しかし、コカ・コーラさんをはじめとする関係者の方々に万全の感染対策とサポートをしていただき、当日は全力で楽しみながら演奏することができました。

オリンピックに、日々励んでいる合唱演奏という形で携わることができたことは一生の思い出で

す。将来、大学生活を振り返ったときに、このような経験を思い出すことができるのはとても幸いなことです。機会をくださり、ご協力くださった方々へ改めて感謝申し上げます。



▲東京2020オリンピック聖火リレーセレブレーション(富士河口湖特設会場にて)

オリンピック・パラリンピック

市民公開講座 親子かけっこ教室

共催：地域交流研究センター

都留市教育委員会のオリンピック・パラリンピックホストタウン事業

令和3年7月25日（日）に都留市民総合体育館において、本学地域交流研究センターと、都留市教育委員会のオリンピック・パラリンピックホストタウン事業との共催市民公開講座事業として、『佐野夢加 親子かけっこ教室』を都留市内の小学生とその保護者を対象として開催しました。コロナ感染症対策として15組に限定しましたが小学校1年生から6年生まで、親子32名の参加となりました。

今回指導を行ったのは、ロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加特任講師と本学陸上部の学生

3名です。

ウォーミングアップのランニングから始まって、ラインの上を走るライン走やマーカーコーンを利用したスキップやマーカー走などを通して、走るコツを学びました。

最後に今回の東京オリンピック聖火ランナーでもあった佐野さんの聖火トーチを使った親子リレーも行い、その後は東京オリンピック・パラリンピックのボードの前での撮影会も行われました。東京オリンピック開催期間中でもあったことから、記憶に残る親子公開講座となりました。



▲マーカーコーンを利用したスキップ走



▲聖火トーチを持って佐野夢加さんとの撮影会

東京パラリンピック競技大会開会式宣誓



▲谷口裕美子さん(向かって一番左側)

8月24日に行われた東京2020パラリンピック競技大会開会式で、水泳コーチの谷口裕美子さん（平成3年度本学卒、本学非常勤講師）がコーチ及び役員代表として選手団主将の車いすテニス男子・国枝慎吾選手と副主将のゴールボール女子・浦田理恵選手とともに、「チームの名誉のためにパラリンピックムーブメントの基本原則に則り、パラスポーツを通じて世界をよりよい共生社会にするために、このパラリンピック競技大会に参加することを誓います」と力強く宣誓しました。

新型コロナ禍における大学の対応(連載)

令和2年(2020年)2月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス(COVID-19)の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、3月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの(スペイン風邪では2年～3年)であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

新型コロナ禍における授業等の教育活動

学長補佐(教務担当) 佐藤 明 浩



新 型コロナウイルスの感染拡大のなか、感染防止対策を講じた大学の活動も2年度目を迎え、後半に入っています。これまで、本学では、授業等の教育活動、部活等の課外活動において、感染の広がりがみられる事例は生じていません。学生、教職員のみならずが感染防止に努めていただいている結果であり、新型コロナウイルス感染症等対策本部(以下、対策本部)の一員として、感謝を申し上げます。

本学では、昨年度当初に対策本部、そのもとに対策チーム・学生部門(リーダー:加藤めぐみ学長補佐(学生担当)・保健センター長)、同・教務部門(リーダー:佐藤)が置かれ、後に同・情報部門(リーダー:杉本光司副学長(学生・教育担当))が加えられ、学生、教職員の健康と安全を守りながら学修の機会を適切に確保すべく、対策を続けてきました。以下、授業実施等につき、1年半余りの対応をふりかえっておきます。



令和2年度前期

昨年度前期は、授業開始を1週間ほど遅らせて4月22日からに変更、遠隔授業のみで始めることとし、また、定期試験期間(8月5日～11日)を補講期間に変更しました。入学式は中止、各学年のオリエンテーションは、原則オンラインによる実施となりました。この間、遠隔授業実施に備えて、ウェブ会議システムZoomの体験学習会も行われました。新型コロナの感染拡大が続き、緊急事態宣言の適用が全国に拡大されるなか、5月中は遠隔授業のみの実施とせざるをえませんでした。対面授業開始への準備もすすめました。各教室の座席の数と配置を密接、密集を避ける仕様に整える、手指消毒用アルコール液を教室入口等に適切に配備する、授業形態と感染防止対策について担当の教員と協議するなどです。

5月には新規感染者数が減少傾向に転じ、6月17日から、実験・実習・実技を伴うなど対面が必須である科目について、対面授業を開始しました。一方、遠隔授業が続く科目も多いなか、コロナ特設サイトを設け、情報部門が授業方法や教材についての情報を提示していくことや、学生のICT相談員が諸々の相談に応じるなどのサポートがなされるようになりました。遠隔授業では出される課題が多くなり過ぎる傾向のあることから、教務委員会から留意と配慮を求める通知も出していただきました。

対策本部会議では、教育、研究、課外活動、窓口業務など大学の諸活動について、感染状況、社会情勢に対応する活動指針を策定し、7月28日から適用しました。当時のレベルは4段階あるうちの2(制限(中))と判断されました。そして、結果的には、令和2年度中はレベル2が適用され続けることとなります。

前期授業の成績については、遠隔授業を実施してきた科目では、対面の試験は行わず、各科目担当者には遠隔による方法で評価をしていただきました。

令和2年度後期

7月から8月にかけてのいわゆる第2波の影響で、後期からも活動指針レベル2が続くこととなり、遠隔授業が中心となりました。一度も教室で授業を受けたことがない1年生も多くいるというこれまでになかった状況が続くなか、対面授業の機会を増やそうと模索が続き、遠隔授業を実施している科目において、回数を限定して対面授業を行うことを可能とすることなどを試みました。また、全体の活動指針についても見直しが行われ、レベル1と2の間にレベル1.5を新設するなどの改訂を施した活動指針が12月16日に示されました。後期授業開始頃には、1号館の各教室に換気扇を設置する、教室等にアクリル板、パテーションを配備、設置する、各建物の入口などに自動検温器を設置するなどの感染防止対策がすすんでいたこともあり、活動指針の改訂と並行して、レベル2でもより広く対面授業を実施できるよう、対面の範囲を広げた設定を準備しました。ただし、すでに授業期間がすすんでいたこと、年末・年始をピークとする第3波が訪れたこともあり、新しいレベル1.5または2については、次年度から本格的に運用する見込みとなりました。

なお、学外授業や授業以外の対面による教育活動については、保健センターのアドバイスによって感染防止対策を講じていただいたうえ、それらを対策チーム・教務部門が確認し、対策本部会議に提案、その承認を経て実施していただくことが続きました。

令和3年度

昨年度末には、感染状況が落ち着いていたことから、今年度は、改訂後の活動指針レベル1.5により活動を開始することとし、授業については、履修者数が多い教養科目ではオンデマンド授業、他の科目では対面授業を実施することとしました。4月後半

には第4波が訪れ、東京都などには緊急事態宣言が出されましたが、山梨県内とくに富士東部では、感染の広がりがみられなかったことから、レベルは変更せず、7月まで、学内では感染者が出ないまま、上記の授業形態を続けることができました。ところが、7月末から8月上旬にかけて、学生等の感染が相次いで報告され、地域の状況も急速に悪化しました。定期試験は2日目以降、急遽中止せざるをえず、成績評価についても緊急の対応を強いられることとなりました。活動指針のレベルは、8月5日からレベル3に引き上げとなり、山梨県にもまん延防止等重点措置が適用される厳しい状況が続きました。

後期もレベル3での開始を予定していましたが、9月半ばあたりから感染状況は急速に好転したため、10月1日から活動指針のレベルを2に引き下げ、11月1日からは1.5への引き下げを予定したところでこの原稿を書いています。



昨年度初めは突然のように全面遠隔授業が始まり、今年度前期末には急遽定期試験が中止となるなど、予想しなかった、未体験のことが続きましたが、大きな混乱なく授業等がすすめられましたのは、学生、教職員のみなさまの協力によるものです。教務委員会ほかの各委員会、各学科、各センター、事務局の尽力にも支えられています。あらためてみなさまに感謝申し上げます。コロナ禍下の授業実施等については、検討課題も多くありますが、紙幅に余裕がなく、言及することができません。これまでもさまざまご意見等をいただいておりますが、今後ともご提言、ご助言をいただきながら、可能な限り体勢を整えていきたいと考えております。引き続きご協力いただけますよう、お願いいたします。

本学における 新型コロナウイルスワクチン 職域接種を終えて

新型コロナウイルス感染症は、本学においても対面授業の機会が大きく失われるなど、通常の大学での生活を送ることに制限をかけることを余儀なくされたり、海外留学の夢を実現することが難しくなってしまった学生、さらには課外活動やアルバイトなどもできなくなり、様々な社会経験をつむ機会を失いました。



このような、状況において、令和3年6月7日に内閣官房長官より企業や大学で行う「新型コロナウイルスワクチン職域接種」の申請受付を開始する旨の発表があったことを受けて、本学では、学生・教職員の健康を守り、さらにワクチン接種に関する地域の負担を軽減し、接種の加速化を図るため6月末に申請をいたしました。

この間、大学事務局にワクチン班を立上げ、ワクチン接種を希望する学生及び教職員を把握するためのアンケートの実施や医療機関、実施日程、接種方法等の打ち合わせを重ねる中、8月に厚生省から実施の承認通知を受け、山梨大学医学部附属病院の協力により1回目のワクチン接種を9月4日、5日、2回目のワクチン接種を10月2日、3日の日程により、予定人数1600人を対象に実施することを決定しました。

実施日程が決まってからは、ワクチン班による



ミーティングを数多く重ね、安全かつ効率的な接種体制を構築するためにはどのようにしたらよいか四苦八苦の連続でしたが、当日は、接種者が約30分間の滞在時間で円滑に接種を実施することができました。また、接種後の副反応がある学生にも医師・看護師による迅速な対応により、安心して運営することができました。

今回のワクチン職域接種は、4日間にわたり、医療従事者延べ87人、大学事務職員延べ74人が業務を担う一大事業となりましたが、1468人が2回目の接種を無事に終了することができました。

今後において、学生が一日も早く安心して生き生きとした学生生活を送ることができることを願い、実施にあたりご協力いただきましたすべての皆様に心から感謝申し上げます。



令和3年度 第1回FD講演(研修)会開催

7月28日水曜日、長引くコロナ禍において、大学として安全・安心なキャンパスの実現をさらに目指すため、本学産業医の川島健司医師を講師に迎え、「コロナウイルス感染症の現状と教育現場における感染症対策について」と題したFD講演(研修)会を開催しました。

コロナ禍の昨今、新型コロナウイルス感染症に関する理解を深めるとともに、感染症対策を講じた授業の工夫や学生への配慮のヒントを得られるよう、対面及びオンライン形式で実施し、教職員129名が参加しました。

研修会では、プロジェクターを用いて、新型コロナウイルスの最新情報や罹患した場合の症状及び後遺症について説明を受け、また、感染予防の基礎知識、感染防止対策とワクチン接種の有効性について学びました。

専門家の方からの分かりやすい説明に、参加者



からは「ぼんやりとした知識が鮮明になりスッキリした」、「ワクチン接種を不安に感じている学生に正しい情報を伝える必要性を感じた」、「不織布マスク着用や室内換気の正しい理解が必要だと再認識した」等、感想が寄せられ、教職員間で感染症対策に関する基本情報の共有が出来て良かったと好評でした。

なお、この研修動画を、学生も含めて多くの関係者が視聴できるよう、学内サイトにおいて公表しております。

本学FD委員会では教職員の資質の向上と適切な学生指導を目指し、有意義な研修を定期的に開催して参ります。

「都留市コロナに負けるな！ 市民生活応援商品券」配布

令和3年度は、コロナ禍において収入が減少した学生や地域経済のために、昨年度に引き続き都留市と協力し「都留市コロナに負けるな！市民生活応援商品券」を在学生全員に送付いたしました。

6月に3,391名、11月に3,342名に3,000円分(共通券2,000円、地元店舗券1,000円)の商品券を送付し、大学生活の一助となりました。また、都留市に住民票を移している学生には市民として、都留市から6月に5,000円(共通券2,000円、地元店舗券3,000円)、11月に10,000円(共通券2,000円、地元店舗券8,000円)の商品券が送付されております。

都留市にお住まいの学生は、この機に適切な住民票の異動をお願いいたします。



パルシステム山梨様から

生活協同組合パルシステム山梨様からの、「コロナ禍で、バイトができない、仕送りが減ったなどの経済的な理由などで生理用品の入手が困難な学生を支援したい」との申し出により、生理用品200箱を寄付していただきました。

生理用品は、7月28日にパルシステム山梨理事長 梅原さまに直接都留文科大学に持ち込んでいただき、その際に大学職員と学生の支援について意見交換を行いました。

7月29日30日に行った学内での配布の際には、学内サイト・Twitterなどで周知をし、多くの学

生が訪れました。

パルシステム山梨様のご厚意に心より感謝申し上げます。





時代に合わせた教育の形

国文学科4年 角 拓 哉

3週間、母校である群馬県の高校で教育実習をしました。ただでさえ、授業準備や進路指導で忙しい中、感染拡大によって指導の仕方も工夫しなければならない状況で、時間を割いてご指導いただいた先生方、高校には感謝しかありません。

実習の内容としては、担当したクラスの朝と帰りの「ホームルーム指導」、他の先生方の「授業参観」、自身の「授業準備と実施」、校長をはじめ先生方に授業を見ていただき、講評をいただく「研究授業」がありました。

朝のホームルームでは短い時間で必要なことを伝えつつ、生徒の体調を顔色などから把握し、1時間目にうまく受け渡さなければなりません。私は、いつもより元気のなさそうな生徒がいたら、ホームルーム後少し話し、体調が悪そうなら後ほど保健室に行くことを勧めたり、週番の生徒に気にしてあげるよう声がけしたりしました。

授業参観では、国語科の先生方はもちろん、他の教科の授業も積極的に参観させていただきました。プロジェクターを使い、板書の時間を短縮したり、総合の授業では、生徒が興味を持ったトピックからグループを作り、1年間かけて自由に研究し、論文で発表させるという、ゼミのような授業をしたりしており、私が高校生だったころよりも新しい授業の方法を取り入れていることに驚きました。

自身の授業では、2年生普通科3クラスの古文を担当しました。同じ普通科の2年生でも、クラスによって、生徒によって雰囲気や理解度が全く異なり、ただ同じ授業を3回繰り返すだけではうまくいきませんでした。そこで、各クラスの担任の先生に生徒の雰囲気や指導のコツを聞き、授業の展開に役立てたり、指導担当の先生に付き合っていたり、何度も授業の練習を行ったりしたところ、次第に生徒も理解してくれるようになりました。また、他の先生方の授業を参観し、授業の工夫を真似したり、社会科で冠位十二階や平安京を扱っていれば、古文の内容と結びつけて導入する、教科横断型の授業を展開したりすることで、社会科だけでなく、古文の理解

にもつなげることができました。

掃除の時間や帰りのホームルーム、部活動など授業以外の時間では、積極的に参加し会話をするようにしました。その中で、自分が思っている以上に、生徒は私のことを理解しようとしてくれていることを知りました。お互いに知ろうとしてくれていることが分かり、信頼関係が構築されると、自然と授業もうまくいくようになりました。

今回の実習を通して特に感じたことは、私が生徒の立場だったとき、先生方がどれだけ私たちのことを考えてくれていたかということです。指導担当の先生に何度も言われたことで「先生にとっては何度もある日常のひとつかもしれないけど、生徒にとっては一生に一度の大切な高校生活だから、失敗は許されない」という言葉が深く心に刻まれています。実際に授業を生徒にしてみても、先生方の裏側を見てみて、全ての先生が生徒に対して情熱と責任をもって取り組んでいることを知り、改めて、教師になりたいという想いが深まり、指導者としての責任を自覚することができました。社会に出るまでの短い時間を、少しでも有意義に過ごし、胸を張って教壇に立てるようにしたいです。



↑先生と生徒たちからいただいたお花と寄せ書き



実りに満ちた4週間

英文学科4年 小金澤 惇 矢

私は、5月に母校である長野県の高校で4週間の教育実習を経験させていただきました。はじめに、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中で、教育実習生として受け入れていただいたことに改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

教育実習は、私にとって実際の高校生と関わる初めての経験でした。そのため、はじめは戸惑う部分も多くありましたが、日数を重ねるごとに堂々と教壇に立てるようになりました。教育実習では数えきれないほど多くの学びがありましたが、今回はその中から二つ紹介します。

一つ目の学びは、「理論通りにはいかない」ということです。教育実習までの三年間、大学の教職関連科目で学んできた内容はすべて、教育の「理論」の部分でした。たとえば、実習までに何度か英語の模擬授業を経験してきましたが、相手（生徒役）はすべて大学生でした。しかしながら、現場で授業をする相手は高校生です。実習中の授業においては、大学生相手の模擬授業であればすんなり進むような箇所が、高校生にとってはつまずきやすいポイントで指導案通りに授業が進まない、という場面が数多くありました。また、教材研究の段階で「つまずきポイント」として準備を進めていた部分が意外にもすんなりと進み、予想にもしていなかった部分でのつまずきが見られることもあり、目の前にいる生徒に合わせた授業を展開していくことの大切さや難しさを学ぶことができました。さらに、このような経験を踏まえて、事前に行う教材研究の意義についても深く考えることができました。教材研究の段階で、可能な限り想定される質問に対する答えやポイントの解説を多く準備しておくことにより、臨機応変に授業を進めていけることを実感しました。

二つ目の学びは、「授業以外での関わりが大切である」ということです。私は実習期間中、でき

る限り授業以外の生徒の姿や先生方の行動にも目を向けながら生活しました。部活動の見学や、先生方の授業外での生徒への接し方を拝見するなかで、教科指導以外でのかかわりによって築かれる信頼関係が、肝心の授業に生きているということを学びました。また、先生方の生徒をいちばんに考えて行動されている姿から、学校という現場の根幹には、「これからの社会の担い手」を育むための一貫した生徒指導方針があるということを感じることができました。

教育実習では数多くの学びがありましたが、“教師になりたい”という気持ちがより一層強まったことは、いちばんの収穫だと感じています。同時に、「教師としての自分」に不足している知識や能力を再発見するきっかけとなり、残りの大学生活を通して克服していかなければならないポイントを知ることができました。実習での経験を踏まえて、自分の目指す教師像に少しでも近づけるよう、今後も励んでいきたいと思います。



↑実習最終日に生徒たちからいただいたもの



教育実習を振り返って

英文学科3年 板垣 彩夏

私は、8月の末から3週間、母校（中学校）にて教育実習を行いました。新型コロナウイルス拡大により、緊急事態宣言が発令されている中での実習となりました。そのような環境下で受け入れてくださった校長先生を初めとした実習校の先生方、手厚いご指導と、ペアワークやコミュニケーション活動で支障をきたすことがないよう学校全体に働きかけてくださった指導教諭の先生には非常に感謝しております。

実習期間は毎日が出会いと学びに溢れており、とても充実していました。私は3年生4クラスの授業を担当させてもらい、合計32時間分授業をしました。それだけ準備をすることが多く、毎日帰るのが遅くなってしまい、弱音を吐いてしまいそうになりました。しかし、授業を楽しみにしている生徒を目の前にするとそんな辛い気持ちを忘れて生徒と過ごす時間を心から楽しんでいる自分がいました。時間をかけて生徒のことを考え、行動に移すことができると生徒も真剣に授業を受けてくれていたことから、教師のやりがいを感じることができました。また担当クラスでは楽しい話だけではなく、自身の経験を基に残り少ない中学

校生活をどのように過ごすべきか真剣に語りかけることもできました。合唱コンクールが控えていたということもあり、クラスが一体となって良い合唱をつくり上げるきっかけとなりたく、道徳の時間を頂き自身の合唱コンクールの経験を基に授業をさせていただきました。生徒は「最後は嬉し涙で終わりたい」とモチベーションを高めていました。合唱コンクールは実習期間終了後だったので実際に聴くことはできませんでしたが、後日最優秀賞を取ることができたと電話で報告してくれました。3週間という短い期間しか一緒に過ごすことができなかったものの、私もクラスの一員としてとても嬉しく感じました。

指導教諭には毎日遅くまで授業準備及び学級経営について相談にのっていただきました。私が中学生の頃からお世話になっている先生だったので、私の中学校生活や今の性格を踏まえてアドバイスを頂くことが多かったです。自身の経験から生徒に何を教えてあげられるか、一緒に考えてくださることで、自分に自信を持って生徒の前に立つことができました。先生の支えがあったからこそ、最大限の思いで生徒に向き合い実習を終えることができたと感じており、感謝の気持ちでいっぱいです。

大学に入学してから実習が始まるまでの約2年半、教職課程や英語科教育法の授業で教師としての素質・授業の組み立て方を勉強してきました。生徒を目の前にして、学んだこと全てがセオリー通りに進むことはありませんでした。しかし、理解を深められる授業づくりや生徒との関わり方など、学んだことを意識して実習に臨むことで、自身の学びと教師の在り方の考えの深まりに繋がりました。実習で学んだことを踏まえて今後はより教育について考えを深められるよう、一生懸命学んでいきます。



↑実習最終日に生徒から頂いた贈り物



ICT × 工夫 × 学び

国際教育学科4年 駒 走 聡 俊

私は今年の5月31日から6月19日までの3週間、国語科の教育実習生として母校で教育実習を行った。3週間の教育実習を通して学んだことは、大きく分けて2つある。

1つ目は、教材への理解を深める方法だ。私は3週間の内、2週目から授業を担当し、合計11回授業を受け持たせて頂いた。それらの授業を行う上で、特に大変だったことが毎日の教材研究である。私が担当した題材は『山月記』だったのだが、私自身『山月記』を高校時代に学んだことがなく、今回の教育実習で初めて触れた文学作品だったため、授業づくりやそれに伴う教材研究には大変苦労した。

教材研究をやり始めた当初は、ただひたすらに教科書を読み込もうと努力したのだが、『山月記』の漢文調をベースとした文体や語彙に悩まされ、教材研究はおろか教科書を読み進めることでさえ満足にできなかった。そこで一つ思いついたのが、『山月記』の解説をしている動画を活用することである。実際に、YouTubeを始めとした動画配信サービスでアップロードされている解説動画などを最大限活用して『山月記』の内容を深く理解し、多様な観点から『山月記』を分析しようと試みた。また、そのような解説動画の多くは、単に教材の内容や知識を述べているだけではなく、視聴者がより分かり易く内容理解をすることができるよう沢山の工夫が動画内に凝らされている。そのため、そのような解説動画を見れば見るほど自分の理解が深まるだけではなく、生徒に『山月記』を教える際に意識した方が良いポイントや、人に知識を分かり易く伝えるために必要なテクニックなども学ぶことができた。

2つ目は、ICT（情報通信技術）を用いた授業実践の方法である。現在 GIGA スクール構想に伴い、多くの学校で児童生徒向けの一人一台端末

と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、ICT教育の実践が全国的に広まっている。そのような学校教育の変化を踏まえ、私も授業ではプロジェクターを用いて黒板にパワーポイントのスライドを直接投影し、各スライドの内容が印刷されたプリントを配布した。また、黒板に直接投影する工夫としてスライドの背景を黒にし、文字を白と黄色に限定するなどして、どの生徒にも分かり易い授業づくりを心掛けた。その結果、他の教科と比べて板書に時間が取られやすい国語の授業でも、板書は重要な語句のみに留めることができ、各回の授業で生徒と対話しながら『山月記』について一緒に学びを深めることができた。

実習期間中は慣れないことばかりで心労が絶えることがなかったが、それ以上に今後教員を目指す上で必要な心構えや、教材を様々な角度から分析する方法を学ぶことができた。特に ICT を絡めた現代的な授業を実践できたことは、今回の教育実習で得た大変貴重な経験であり、来年に控えている小学校での教育実習においても大いに活かしていきたい。



↑実習期間の様子



教育実習での学び

国際教育学科4年 廣 瀬 あゆみ

私は、6月の上旬から3週間、母校の高校で教育実習を行った。昨年に引き続き、新型コロナウイルスの感染が収まらない中でも、実習生を受け入れて下さった母校に感謝したい。コロナ禍の高校生活は、私が経験したものとは大きく異なっていた。毎朝の体温測定、ランチパーティーの使用、密にならない環境づくりなど、「生徒の安全を守る」という教師の重要な役割の一つを実感した。特にコロナ禍での学園祭に向けた取り組みは、多くの制限があった。それでも生徒たちは自分達で考えながら工夫し、学園祭ができることに感謝しながら準備に臨んでいたことが印象に残っている。

私は、「生徒と積極的に関わり、信頼関係を築くこと」および「教科の専門性を高めること」という2つの目標を掲げて実習に臨んだ。実習の初日から、清掃や休み時間に生徒に積極的に話しかけた。生徒が何の部活に入っており、学園祭ではどの部門なのか、どんな悩みを抱えているのか、どんなことに楽しみを感じるのか、少しでも理解しようと行動し続けた。HR担当クラスの2年6組の生徒たちはあだ名を考えてくれ、教室以外でも私を見かけると名前を呼んでくれた。他クラスの生徒たちも声をかけてくれることが増えてい

き、少しずつ生徒たちが心を開いてくれるのがわかり嬉しかった。特に印象に残っているのは、生徒が「先生に英語を教えてほしい!」と言ってくれ、朝早くに学校にきて一緒に英語のプレゼンテーションの原稿を作ったことだ。実習生の私を一人の教師として頼ってくれたこと、感謝されたことが嬉しかった。生徒の学習の助けになれたことを実感した瞬間だった。

教科の専門性を高めることについては、全学年の英語科の授業を見学させていただき、授業展開や教材の使い方、発問の意図などを学んだ。3週間の実習を通して学んだことは、指導案通りに行く授業はないということだ。私は大学の授業で学んだ Oral Introduction をパワーポイントを使って行うことに挑戦した。1回目の授業にはかなりの時間をかけて指導案を作り準備をしたが、テレビにパワーポイントが映らないということが起こり、パニックになった。このような想定外のことが起きることが多々あったが、指導教諭に助言をいただきながら、徐々に柔軟に対応できるようになっていった。想定外のことも楽しみながら生徒と一緒に学んでいく姿勢が大切だと学んだ。また、同じ授業でもクラスの特性に合わせた指導が重要だと改めて実感した。想定外の発言や意見からも学ぶことが多く、実習後半は余裕を持ちつつ楽しみながら授業を行うことができた。実習の集大成でもある研究授業では「生徒が集中していた。」「堂々とした態度で授業を通して生徒との信頼関係が見られた。」と評価していただけた。

3週間という短い期間ではあったが、教師という仕事の楽しさ、大変さ、責任など多くのことを学ぶことができた。2つの目標も達成できた。3週間の思い出と母校での出会いは、今後の私の人生において大きな支えになるだろう。今後も周りの人に感謝を忘れず、学び続けていきたい。



↑生徒からもらった花束やメッセージカード



教育実習で学んだこと

学校教育学科3年 小坂もえ

私は、10月上旬から3週間、母校である山梨県の小学校で教育実習をさせていただきました。担当は3年生でした。先生方には忙しい中、多くの指導をしていただき、教育実習以前より一層「教師になりたい」という思いが強くなりました。人数の少ない学校であったため、子ども一人一人と深くかかわることができました。子どもたちの豊かな発想や知識の量など、実際に現場で子どもたちと関わってみないとわからないこともあり、私自身新しい発見がいくつも 있었습니다。非常に充実した教育実習になりました。

実習初日が運動会で、やるべき事は担当の先生から言われていましたが、子どもたちとどのように関わるべきかわかりませんでした。なので、子どもたちとたくさん関わることを目標にして取り組みました。低学年や高学年の表現や子どもたちが一生懸命頑張る姿を見てとても感動しました。子どもたちは大人を感動させるほどのパワーを持っている、また、子どもたちの成長を運動会などの行事でも見ることができる教師はとても良い仕事だと思いました。

教育実習を終えて最も大切だと思ったことは、子どもたちとの信頼関係を築くことでした。授業を行うにも、運動会や校外学習などの学校行事を行うにも、教師と子どもたちの信頼関係が築いていないと成立しないものであると感じました。また、信頼関係が築けていると、授業内での子どもたちの発言やつぶやきが増え、そこから話題を広げていったり新しいことに気付いたりなど、子ども主体の学びができると授業を行って感じました。大学でも模擬授業などを経験してはいましたが、相手が大学生と子どもでは全く違うものでした。発問をするタイミングや日常生活と結びつけた内容にすることで子どもの興味関心が高まるな

ど学ぶことがたくさんありました。子どもの反応はとても正直で、その様子を見ながら臨機応変に対応していく必要があると学びました。

また、担当学年以外の授業観察に行かせていただく機会がありました。学年によって指導の仕方や授業の進め方が違うとわかりました。それぞれの学年の実態や学習のレベルにあった授業展開を必要があるため、教師はまず、子どもの実態を把握することから始めることが大切だと学びました。その上で、子どもたちとの信頼関係を築いていくとよいとも学びました。

教師の授業を行う姿だけでなく、授業以外での仕事も知ることができました。テストの丸付けをしたり、次の日の授業の準備をしたり、子どもたちの様子を他の先生方と共有したりなど、子どもたちがより良い学校生活を送れるように常に動いているのだと感じました。

これから本格的に教員採用試験に向けての準備が始まります。この3週間で学んだこと、新しく発見したこと、子どもたちと過ごして感じた気持ちを大切に、頑張っていきたいと思います。



↑がんばれ！もえ先生の会



意思と責任

学校教育学科3年 高橋 みく

私は、母校の小学校にて3週間教育実習を行った。新型コロナウイルスの影響から、分散登校が行われており、対面とオンラインとのハイブリット型授業を展開していた。そのため、今日顔を合わせた児童は昨日とは違う面々で、児童とは1週間に2,3回しか直接会えず、学級全員がそろって登校するところを見ることはなかった。分散登校中毎日オンライン授業の児童もいたため、一度も会えなかった児童もいる。また、急遽全児童オンライン授業となり、教室には誰もいない中で授業を行った日もあった。そんな状況の中で実習をさせていただけてとても貴重に思う。

私は教育実習を通して、授業経営・児童との関わり・学級経営・教師の在り方・オンライン授業(コロナ禍の学校教育)について等、数多くのことを学んだ。その中で自分自身実習を通して変わったと思うことを話していこうと思う。私は、自分の行動や選択に対して常に誰かの正しさを基準に考える。それは、自分の行動は誰かにとって正しいものか、誰かに否定されるような間違った行動でないか、というような自身で正しさを決めず目先の誰かの基準に合わせることである。はっきり言うと行動に対して意志がない。しかし、実習を通して、意志は必需品であり、共に責任も持つ

べきだと学んだ。授業や学級経営においても、児童と関わる際も、どの面においても必要であった。授業経営で大切なのは本時や単元で児童に一番理解してほしいことは何か、教師自身がねらいを明確に持つことである。実習当初は担任の先生を前にして授業をするため、児童と向き合うというよりは先生から指摘されないような正しい授業を行おうとしていた。指導書通り一般的な流れの進行をするが、相手は目の前と画面上にいる児童であり、あらゆる視点からくれる考えを、どこに落としたいのか判断できなければ、児童の声が活かせないと痛感した。自分が授業内で何を伝えたいか意志を持つとともに、それを裏付ける理解度と教材に対する自己追求が授業を行う上での責任であると感じた。

学級経営も担任の意志が重要であった。今回、全学年の授業見学をさせていただいたが、教室に入るだけでその学級の色がはっきり存在し、担任が持つ学級への願いや思いが児童や教室から分かるものだった。これだけは許すことが出来ないという譲れない点を持つことや、思いを形として具現化するには、朝の会や帰りの会でどう伝えるべきなのかを考えることが大切だと教えていただいた。私の研究授業中、校庭にドクターヘリが着陸する事態が起きたときも、安全面や児童への指示の判断は教師の立場である私が行った。学校現場ではいつ何が起こるか分からない、誰かの判断に任せるのではなく私の意志と責任が児童に影響することを経験した。

私は、3週間の実習でここでは触れてないが、もちろん児童との思い出も山ほどあるけれど、自分自身一番変わったこととして、意志と責任を持つことの重要性を痛感したことである。今まで合わせていたのではなく、責任逃れをしていたのだと気づけたとともに、自分の意志に責任を持つために今後は学ぶ姿勢を大切にしたいと思った。



↑児童が描いてくれた笑顔の私



学び続ける

地域社会学科4年 小 尾 英 廣

私は、6月に3週間、高校の教育実習を世界史で行った。大学でこれまで学んだことを発揮して、いこうと最初は意気揚々と取り組んでいった。しかし、実習4日目で自分の力不足を痛感させられる。最初に指摘されたのは、学習指導案だった。誤字脱字や指導案を人に見せるときに内容を理解してもらえないなど書き方を注意された。2週間目から私は本格的に教壇に立って生徒たちの前で授業を行った。先生からは、「生徒たちが初めて学ぶつもりで取り組みなさい」と言われ、そのことを考慮して授業を行ったつもりだった。しかし、実際は、生徒に質問したら、予想外の質問が来たり、生徒が悩んでしまったりと、質問の仕方や授業内容の取扱い方など、課題が多く出た。わずか数日の間で、自分の自信といったものは打ち砕かれた。自分は生徒が考えられるような、発展的な授業をしてみたいと思っていたが、それどころの問題ではなかった。現場に立って初めて、自分に足りないものが何かを気づかされたのだ。指導受けてから、私は初心に帰って、教科書を読み直し、単語の意味を調べ直した。内容はその学校の生徒に合わせたものにしなければならず、それに合わせて、授業の導入に用いるネタを考えた。授業の形がなかった私は、導入を何分、展開を何分、結論を何分にするかなど細かく考え直した。その上で私は再び授業に臨んだ。わかりやすく、決めた授業の時間通りに取り組んだ。その結果、先生から「少し良くなった」と評価された。その後も指導を受けながら進め、研究授業では、及第点をいただいた。もっとわかりやすい授業を作っていきたい。そのためにこれからも精進していく。

また、生徒との交流に関しては、授業終了後や、放課後の時間、自分の持っている授業以外の特別活動の時間などで、生徒たちと交流し、世界史以外の授業や授業以外で生徒がどんな顔を見せるの

かを見ていった。しかし、もう少し自分から積極的に関わっていくべきだと思った。コロナウイルスのことを考え、生徒に万が一のことがあってはと考えたり、学園祭が近かったため、その準備の邪魔をしてはいけないと考えたりするあまり、自分が担当したクラスや、出身の部活動などに顔を出すことが少なかったのではないかと考える。そこをもう少し力を入れて取り組めば、もっと良い実習になったと考える。

3週間の実習では、母校の多くの先生方が厳しくも、丁寧に指導し、心配していただいた。その中で自分の未熟さを痛感し、さらに学ぶことが必要だと再認識された時間だった。その中で特に嬉しかったのは、生徒たちが、授業終わりに質問に来てくれたことだ。自分の授業で世界史に興味を持ってくれたことが何より嬉しかった。教育実習で私は教師になりたいという思いはより強くなった。この経験は私の中で貴重で、大切なものである。この時の思いを忘れずにこれからも励んでいきたい。



↑生徒たちから貰った色紙と花束、授業で使った資料集



実習で学んだこと

地域社会学科4年 鈴木 智 弓

私の教育実習は高校1年生の世界史を担当しました。この実習を通して、授業が難しいことやどのように生徒との関わりを作ることができるのかを実感しました。

授業が難しいとは授業準備から始まり、具体的に3つあります。1つ目は授業内容をいかに簡潔に分かり易くかつ、情景をイメージできる説明を行えるかという点です。生徒は世界史を学ぶのが初めてであるため、イメージをすることが容易ではないので想像しやすいように話すことを意識しました。しかし、その話が多いと授業で何を学ぶのかが分からなくなってしまうことがあります。そのため、簡潔にまとめ、イメージがしやすいという説明のバランスが大切です。2つ目に、発問するときに何をどのように問いかけると、着目してほしいことについて生徒が考えられるのかという点です。各授業のトピックの中で重要な部分を取り上げ、発問を考えますが、生徒の捉え方と一致する形で問いかけができない場合、着目してもらいたい部分においての思考ができないことを学びました。また問いかけ方だけでなく、その物事の説明が不十分の場合も生徒自身のイメージ

が出来上がらないため、発問しても何を考えるべきなのかを掴むまでに時間がかかってしまうこともありました。3つ目は、同じ授業進度のクラスを複数担当する場合、1回目とそれ以降では授業の質が変わってしまうという点です。1回目の授業では、説明がまとまっていなかったり、分かりにくい説明になってしまったりしました。自分自身は1度作った授業で何回か授業を行います、生徒からすればたった一度の授業なので、責任をもって1回目からしっかり授業を行える準備をしなければいけないと思いました。

どのように生徒との関わりを作るかについては、HR担当の先生の姿勢から学ぶことが多くありました。朝のHRの時間の前に教室に行き、簡単に掃除をしながら生徒に声をかけていたり、帰りのHRの終わりにクラスに残る生徒に話しかけていたりしました。私もそれに倣い、朝や帰りの時間を使い、生徒に積極的に話しかけました。しかし、朝や帰りの時間では、関わりを持てる生徒は少なく、あまり関わりが持てない生徒の方が多くなってしまいました。そのため、授業中や授業前後の時間も貴重な関わりを持てる時間であり、工夫が必要であると感じました。また、生徒に取り組んでほしいことがある場合にHR担当の先生が率先して行っていたことに感銘を受けました。例えば、読書月間として朝に読書の時間が設けられる場合は、先生は早めに教室に向かい、静かに読書をしていたり、ある生徒の追試として英単語の試験がある場合には、その生徒から試験範囲を聞き一緒に勉強したりしていました。私は、生徒がどうしたら取り組む「声掛け」ができるかという考えしかなかったので、自ら姿勢で示すことの大切さを教えてもらいました。

授業についても、生徒との関わりについても学ぶことが多く、力不足の部分を強く実感しました。この経験を活かし、残りの大学生活で学びを深め、教員として働く中で実践を積み重ねていきたいと思っています。



↑生徒からもらった色紙

都留文科大学国語国文学会春季講演会

王朝漢語の源泉—句題詩の世界

開催：6月30日(水)

講演者：佐藤道生氏



2021年度国語国文学会春季講演会は、慶應義塾大学名誉教授の佐藤道生先生をお迎えしました。昨年度は春秋いずれの講演会もコロナ禍でやむなく中止となりましたが、一年ぶりに、会場とオンライン配信というハイブリッドの方式で無事に開催することができました。

佐藤先生は日本漢文学、とりわけ句題詩研究の第一人者として知られています。ですが、近年になって研究が飛躍的に進展したこ

の「句題詩」については、馴染みのない人もいるでしょう。「句題詩」とはそもそもいかなるものなのか。先生はまず、『年中行事絵巻』という絵画資料を映しながら、王朝貴族が漢詩を作るのはおもに宮中詩宴の場であったこと、そしてその詩宴では、出席者は主催者の定めた詩題にしたがって詩を作ったこと（これが句題詩）を、わかりやすくご解説くださいました。続いて、具体的に作品を読み解いていながら、次第に句題詩には

日本独自の作詩ルールが形成されてゆき、独特の発展をみせることをお話くださいました。漢詩という中国伝来の文学様式でありながら、中国とは異なる日本独自の表現や形式を発達させてゆく句題詩は、以後和歌の詠みかたにも影響を与えるほか、後代の連歌・連句を生み出す母体となるなど、日本文学史上に大きな役割を果たすこととなります。また、句題詩制作の過程で、日本独自の意味を持つ漢語（和製漢語）も数多く生み出されました。漢籍知を継承してきた平安貴族が、彼らの時代に築いた言葉の世界、楽しんでいた文学の世界の一端を垣間見せてくださるような、充実した講演会でした。

(国文学科教授 長瀬由美)

講師紹介



佐藤道生

慶應義塾大学名誉教授。専門は古代・中世日本漢学。著書に『句題詩論考 王朝漢詩とは何ぞや』(2017年、勉誠出版)、『平安後期日本漢文学の研究』(2003年、笠間書院)、和歌文学大系47『和漢朗詠集 新撰朗詠集』(共著、2011年、明治書院)などがある。

越境する白熊—国境と言葉のサーカス



開催：11月10日(水)

講演者：多和田葉子氏・満谷マーガレット氏

11月10日、本学特任教授で作家の多和田葉子先生と、翻訳家の満谷マーガレット先生をお招きして「越境する白熊—国境と言葉のサーカス」と題する講演会を開催した。今回は Zoom を用いたハイブリット形式で、多和田先生の『雪の練習生』とその英訳である *Memoirs of a Polar Bear* をテキストとしたワークショップを行った。英文学科の学生はもとより、国文学科、比較文化学科などの学科からも多くの学生が参加したほか、一般の方もみえた。

講演会に先立ち、英文学会では夏季休暇期間に『雪の練習生』を読み、各自で感じたことを共有したり、日本語版を読んで各自が英訳し、英語版の表現と比較したりする事前学習を行った。

ワークショップでは、学会生からの発表に多和田先生と満谷先生

からレスポンスをいただいた。

多和田先生は自分がイメージする身体と本当の身体は違っていると考え、物語を白熊視点で描くことで未知の人間そのものを表現しなかったと語った。多和田先生は、「もし自分がホッキョクグマだったら」とか「もし自分がソ連に住んでいたら」と、普段の自分とは異なる視点で作品を書くことを意識されていたようだ。

また、翻訳についてもお話をいただいた。『雪の練習生』については、先生自らが日本語版とドイツ語版を書かれた。英語版は先生のドイツ語版を英訳したものとなっている。ドイツ語と英語はインドヨーロッパ語族のゲルマン語派に属しているため、先生のドイツ語の表現がほぼそのまま英訳されたという。

学会生は、英語の表現や英語の文章量が日本語版の文章量よりも少ないことに違和感を感じていた。これに対し多和田先生は日本語とドイツ語の違いから英語の表現と日本語の表現の違いが生まれたと語った。日本語は相手の同意を求める表現をするが、ドイツ語では相手に媚びることはない。また、満谷先生は、日本語の表現は回りくどい表現が多く、一方、英語表現は簡潔に表現されると話し

た。学会生が試みた英訳に対して英単語の選択や言葉遊びについて満谷先生から指摘されることが多かったが、総じて好評であった。

質疑応答では、ある学生が多和田先生にフィクションに境界線があるのかと質問をした。曖昧な質問だったが、先生は質問の要点を素早く掴み、作品内で、説得力が残り続ける限り境界線はどこにでも設定できると話した。同様に満谷先生も作品の中に論理があれば作品は成立すると述べ、お二人とも学生の質問に完璧に答えられた。

講演会を通して、私たちとは異なるホッキョクグマの視点から見てわかる人間社会の問題について改めて考えさせられた。また、新しい関係にある言語間では翻訳で生じる表現の差はほぼないが、特性が異なる言語間での表現の差は大きいと学んだ。その差を生かしながら、慣用句や音を使った表現を見直したり、二つ以上の異なる意味を使う単語に付与したりする技法を学べて有意義だった。今回の講演会は英文学を学ぶ学生だけでなく他の分野を学ぶ学生の興味も喚起するものであり、たくさんの人が学びを感じることができた素晴らしいものであった。

(英文学科 山内勇人)

講師紹介



多和田葉子 (英文学科特任教授)

1982年早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。同年ドイツに渡り2006年までハンブルグ在住。ドイツの書籍取次会社で1987年まで働きながら、チューリッヒ大学博士課程修了。1992年に芥川賞を受賞した『犬婿入り』や2003年に谷崎潤一郎賞を受賞した『容疑者の夜行列車』を始め、ドイツ語での作家活動ではシャミッソー文

学賞、2016年にはクライスト賞を受賞。今回のワークショップの題材である『雪の練習生』は2011年に野間文芸賞を受賞している。2020年11月には紫綬褒章を受章された。



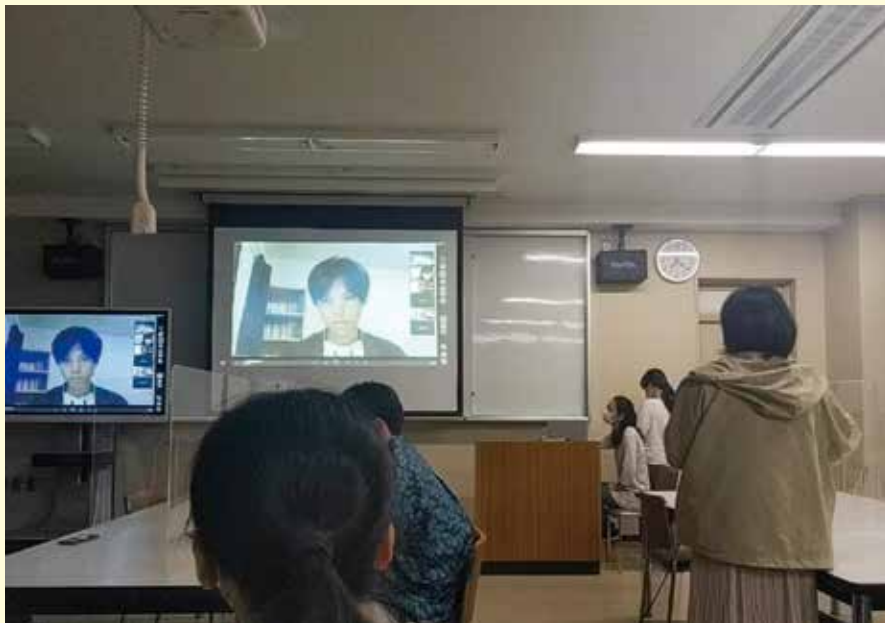
満谷マーガレット

アメリカ、ペンシルバニア州ピッツバーグ出身。ウスター大学卒、東京大学大学院比較文学比較文化修士課程修了。椋山女学園短期大学部、東京工業大学、大妻女子大学、共立女子大学等で教える。多和田葉子、角田光代、大江健三郎などの作品を翻訳。訳書に *The Eighth Day* (角田

光代『八日目の蟬』、*An Echo of Heaven* (大江健三郎『人生の親戚』) などがある。多和田葉子氏の『献灯使』の翻訳 *The Emissary* はアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞(翻訳文学部門)を受賞した。

若者が取り組む正しい性教育の普及

開催：7月7日(水)
講演者：中島梨乃氏
前田かや子氏
伊東勇氣氏



比較文化学会は7月7日(水)に「#SEOセックスプロジェクト」メンバーを迎え、「若者が取り組む正しい性教育の普及」と題した講演会を開催した(講演者と2102教室をオンラインで結ぶハイブリッド開催)。「#SEOセックスプロジェクト」のメンバーは、中島梨乃氏、前田かや子氏、伊東勇氣氏の3名である。当日は、約60名が参加し、活発なやり取りがおこなわれた。

まず、伊東氏より「日本の性教育の問題」について説明がなされた。日本では、性教育が原因によって性行為を行う年齢が早まると考える人が多いため、教科書でも直接的な表現を避ける傾向があると

いう。また、伊東氏によれば、学校で性教育を受けても「自分には関係が無い」と考えてしまう人が多い。そこで伊東氏は、情報が必要となったときに、インターネットですぐに正しい知識が得られるような環境づくりこそ重要であると述べた。

次に、中島氏より活動の目的について説明があった。「#SEOセックスプロジェクト」の目的は「安心して性知識が得られるサイトを検索上位に出すこと」である。これは、メンバーのひとりが性暴力被害に遭い、そのさい、親にも相談ができず、インターネットで支援先を探したものの、信頼できるサイトに辿り着けなかった経験

をもつことが活動のひとつのきっかけとなった。中島氏は、活動を通じてとくに性暴力の被害者や、性に関心を持った子どもへの支援を行いたいと話した。また、インターネットで「死にたい」というキーワードで検索した場合、厚生労働省の相談ダイヤルが表示されるのに対して、「痴漢」と検索した場合にはニュースやアダルトサイトが表示されてきた事実を指摘し、彼女たちは、性被害者がすぐに支援窓口にとどり着けるようにする取り組みを行ってきたことを述べた(なお、2021年11月1日現在、内閣府の性犯罪・性暴力に関する相談窓口が表示される)。前田氏は、「何かを変えたいと思う人は、感情のこもったストーリーで説明をすると良い」と述べたうえで、「当事者の問題」が「社会の問題」になることを願っていると結んだ。

参加者からは、性教育の重要性が社会に定着すべきである、「#SEOセックスプロジェクト」が人権上必要な活動であることを理解したなど、様々な意見が寄せられた。

(比較文化学科 下田理世)



講師紹介

#SEOセックスプロジェクト
(中島梨乃氏、前田かや子氏、伊東勇氣氏)

性や人権の問題に取り組む大学生3人によるプロジェクト。全ての人が必要ときに必要な性知識にアクセスできる環境を求めて活動を行っている。

2021年度国際教育学科 創設5周年記念講演会

北欧デンマークの教育と参加型デモクラシー



開催：9月22日（水）

講演者：能條桃子氏&原田亜紀子氏

今年度の講演会は、学科の学生が運営する都留文科大学国際教育学会との共催で「北欧デンマークの教育と参加型デモクラシー」と題して行われました。国際教育学科創設5周年企画として実施したものです。講演者には能條桃子さん（一般社団法人 No Youth No Japan 代表理事）と原田亜紀子さん（慶應義塾高等学校教諭）のお二人をお招きしました。新型コロナウイルス感染症防止対策からオンラインで開催しましたが、沢山の申し込みがあり北欧デンマークの教育や若者の政治参加への関心の高さがうかがわれました。

講演では、能條さん、原田さんそれぞれより話題提供をいただいた後、お二人にクロストークを行っていただき、最後に参加学生との質疑応答を行いました。お二人のエネルギッシュなトークに時間はあっという間に過ぎていきました。質疑応答のコーナーは、国際教育学会役員の麻生修司さん（1

年生）が司会を務めてくれました。

能條さんは、デンマーク留学をきっかけとして若い世代の政治参加に関心を持ち、帰国後大学3年生の時に「No Youth No Japan」という若者の政治参加を促す団体をInstagramを活用して立ち上げた方です。話題提供では、デンマークにおける若者の高い投票率や積極的な政治参加の前提として、民主主義を育てる土壌や仕組みが確立していること、また幼稚園の時から自分で考え他人との合意形成を大切にする教育が実践されていることなど、デンマーク留学の体験談を交えながら紹介してくださいました。「若者が声を届け、その声が響く社会へ」、そんな社会をつくりたいという能條さんの熱い想いが伝わる講演でした。

一方、原田さんは高校社会科教員として目の前の生徒たちをどのように責任ある市民に育てるかという関心から市民性の育成や民主主義教育に関心を持ち、若者の声

を社会づくりに反映させているデンマークのユースカウンスル（若者議会）について研究をされてきた方です。話題提供では、能條さんの話にあった「若者が声をあげるデンマークの文化」が歴史的にどのように形成されてきたか、特に19世紀後半に農民の主体形成のための学校である「フォルケホイスコーレ」を構想した教育者グルントビィ（N.F.S. Grundtvig 1783-1872）やグルントビィの思想を継承し「生活形式の民主主義」を唱えたコック（Hal Kock 1904-1963）の思想を辿りながら解説してくださいました。

「日々の実践の中で試行錯誤をしながら学んでいくのが民主主義の本質であり、対話や民主主義の問い直しには絶え間ない人間形成が必要である。だから教育が大切なのだ」という原田さんの言葉は、国際教育学科の教育理念や北欧交換留学のめざすものとも重なるものがあります。若者の声が響く社会をつくるためには、若い世代の新しい発想や行動力を大切にする文化や風土をこれまで以上に育てていく必要があるでしょう。今回の講演を通して、どのように学生たちの社会参加の意識を高め、より民主的で平和な社会を作っていくか、学生たちと共に考えるよい機会をいただいたように思います。

（国際教育学科教授 原和久）

講師紹介



能條桃子氏

No Youth No Japan 代表理事
慶應義塾大学大学院経済学研究科修士1年
デンマーク留学をきっかけに政治に関心を持つ。現在、約60人のメンバーと共に、U-30の若者が政治参加する社会を目指して、活動中。ハフポスト日本版 U30 社外編集委員



原田亜紀子氏

慶應義塾高等学校社会科教諭
コペンハーゲン大学社会学部 客員研究員
東京大学教育学研究科にて博士号を取得
デンマークのユースカウンスル（若者議会）における若者の政治参加を研究
共著『北欧の教育最前線』明石書店（2021）

吹奏楽部

私たち吹奏楽部は、10月30日に行われた全日本吹奏楽コンクールに初出場し、銀賞をいただきました。

7月31日の山梨県大会直後から、大学での新型コロナウイルスの感染拡大で活動禁止になり、9月12日の西関東大会は県大会の録音による審査となりました。会場で演奏できなかったことは非常に悔しい思いをしましたが、全国大会への推薦をいただくことができ、活動再開を切に願う日々でした。10月4日の活動再開後、制限がある中でしたが、全員で工夫しながら、時間を大切に練習を重ね、本番を迎えることが出来ました。これまでに味わったことのない達成感でいっぱいでした。

今年のコンクールは、新型コロナウイルスの影響を大きく受けたものでしたが、その中でも全国

大会銀賞という成績を残すことが出来たのは、講師の先生方、学校職員の方々、OBの皆様、地域の皆様の御支援のおかげです。応援して下さった全ての方々に感謝申し上げます。

これからも皆様に私たちの演奏をお届けできるよう、全員で音楽を追い求めていきます。今後とも御支援賜りたくお願い申し上げます。

吹奏楽部部长 菊地希美



学生の活動

合唱団

私たち都留文科大学合唱団は約60年の歴史を持ち、清水雅彦先生のご指導のもと精力的に活動しています。11月20日(土)には、岡山県で行われた第74回全日本合唱コンクール全国大会大学ユースの部に出場し、『金賞』ならびに『文部科学大臣賞』、そして次大会への出場権にあたる『シード賞』を受賞することができました。

昨年から引き続き練習に制限がある中、諦めずに暗中模索し、オンラインで筋トレや体幹といった体づくりや、歌詞及び曲の解釈をして対面練習に備えて参りました。

団員と実際に声を合わせることが出来ない日々は、もどかしく、悔しい気持ちの繰り返しでしたが、だからこそ今年は歌えることの喜びや楽しさ、そしてその環境を与えてくださっている皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお借りし

て感謝申し上げます。

全国大会では、「文大サウンド」に、儼然ないこの世の中への平和、平穏を祈る気持ち、そして、支えてくださる全ての皆様への感謝を込めて演奏いたしました。

応援してくださる皆様と掴みとった全国1位。これからも都留文科大学合唱団は皆様と共に、さらに進化してまいりたいと思います。

合唱団团长 天童 虹





▲都留文科大学
應援團演舞



▲都留文科大学
應援團演舞ダイジェスト



鶴鷹祭

～伝統の應援團演舞動画制作～



令和三年度都留文科大学
体育会副会長兼應援團團長
蟹沢川 荘

押 忍。令和三年度都留文科大学体育会副会長を務めさせていただいております。硬式テニス部所属の蟹沢川荘と申します。副会長の仕事は鶴鷹祭の應援團長になります。應援團は各部から一人ずつ本部員という役員を選出し、男子本部員全員で結成され、昼夜の練習に励みます。今年度は2年連続で鶴鷹祭が中止になってしまいましたが、伝統を引き継ぐために、保健センターの許可のもと應援團の活動のみ行わせていただきました。私にとってこの期間は忙しいものでしたが、一生忘れない経験ができ、最高の演舞ができたことを誇りに思います。この動画とエールが少しでも皆様のもとに届くと幸いです。



体育会会長
浜名康生

蟹沢川君をはじめ、應援團の皆さんお疲れさまでした。鶴鷹祭が二年連続で中止を余儀なくされ、途絶えかけていた伝統を未来に引き継ぐことができほっとしています。来年からは鶴鷹祭が復活し、都留文・高崎経済の両校による熱戦が復活することを祈願するとともに、現在は負け越しているため、来年のホーム開催では勝利できるよう体育会一同精進いたしますので、これからもご援助・ご声援のほどよろしく願います。



オンラインビンゴ企画▲



◀ビンゴ黑板 作成風景

第66回桂川祭 オンライン開催

昨年度も行った芸能人企画と花火に加え、初の学生参加型オンライン企画「どきどき!! オンラインビンゴ」と「体験型ムービー」という企画を行いました。芸能人企画ではお笑い芸人のハナコさん、すゑひろがりずさん、ゆにばーすさんの3組による学生限定ライブを配信しました。サイン色紙プレゼントもあり、特別なライブになりました。オンラインビンゴ企画は、参加者に定員がありましたが参加希望者は定員人数を超え、企画への期待を感じました。企画は無事に進行し、目玉景品の Switch Lite 等、おうち時間を充実できるような景品を当選者に届けることができました。企画後には参加者から好評の声が届き、参加者の表情は見えませんでしたでしたが、楽しんでいたのだと実感しました。

桂川祭を締めくくったのは毎年恒例の花火。新型コロナウイルス感染症対策として観客が密集していないかを実

行委員で大学構内・周辺を巡回しました。多くの人の花火を見上げる表情に、今年も無事に打ち上げられた安堵と喜びがこみ上げて来ました。

一日のみの開催ではありましたが、沢山の方に楽しんで戴くことができ、一実行委員として大変嬉しく思います。開催にあたり協力してくださった方々、また企画に参加してくださった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。来年度以降の桂川祭にもご期待とご協力いただけると幸いです。本当にありがとうございました。



桂川祭実行委員長
城生真那

10月30日に『BALLOON』というテーマのもと第66回桂川祭を開催しました。コロナウイルス感染症の拡大状況に左右されながらの準備となりかなり難航しましたが、無事当日を迎えることができました。

また、各方面から温かい言葉を沢山戴き、学生参加型オンライン企画という初の試みで不安なところはありませんでしたが、無事開催することができて本当に良かったなと思いました。支えてくださった実行委員の皆さんと大学職員の方々、また地域の方への感謝の気持ちでいっぱいです。これからも桂川祭実行委員会をよろしくお願いします。

2021年度

夏季・秋季オープン キャンパス開催報告

今年度の本学オープンキャンパスは、コロナ禍において夏季は来場形式、秋季は Web・オンライン形式で実施しました。両オープンキャンパスのレポートをさせていただきます。



夏季オープンキャンパス

夏季オープンキャンパスは、7月17日（土）及び18日（日）の2日間、来場形式で開催しました。昨年度は新型コロナウイルス感染予防のため、全て Web・オンラインで実施しましたことから、キャンパスでの開催は2年ぶりとなりました。

コロナ禍であることから、これまでとは主に次の点で配慮を加えて実施しました。

1点目は、完全事前予約制・人数限定で実施したことです。受入人数の上限を概ね過去の実績値の半分程度とし、事前予約制で学科説明会や特別授業、キャンパスツアー、図書館ツアー、留学相談等、ほぼ従来の内容で実施しました。学科説明、特別講義、学食体験については、保護者の参加を見送っていただきました。学食体験は、生徒ごとに時間を割り当てて高校生に体験していただきました。

2点目は、感染予防対策の徹底です。当日の受付は、学科ごとに受付場所を設置し、来場者に対して検温、健康チェックシートの確認、COCOAアプリの確認を行いました。来場者にはキャンパスで訪ねた場所や着座した座席を記録してもらい、帰宅時に回収しました。各会場では、換気、清掃、除菌をこまめに行い、来場者には間隔を空けて着座いただきました。

3点目は、Web サイトやオンラインの併用です。これらを併用することで、感染拡大地域にいる高校生や長距離移動に懸念を持つ高校生に対し、参加がしやすくなると考えました。オープンキャンパス開催に合わせ、昨年度に引き続き大学ホームページに、学長メッセージ、大学概要説明、キャン

パスライフ紹介、そのほか各学科説明及び特別講義の録画動画を掲載した特別サイトを開設しました。特別講義については今年度新たに収録し、昨年度の分と合わせて公開しました。また、個別相談は、事前予約制による対面形式と、事前予約制でオンライン通話ソフト Zoom を併用したオンライン形式の2通りの方法を併用して実施しました。

このような下で実施した結果、2日間で921名の参加がありました。オンラインの個別相談には、計67名の参加がありました。

参加した高校生へのアンケートによると、来場者は山梨県内からの高校生が最も多く約35%、次いで静岡県からの約17%でした。学年は高校3年生が最も多く、約72%を占めました。また、来場者の約70%が本学を第一志望としていました。将来希望する職業は、教員が最も多く約43%、次いで公務員約22%でした。

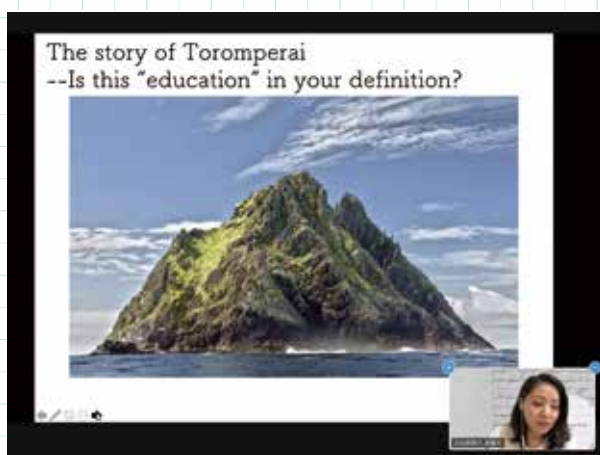


▲夏季オープンキャンパス特別講義の様子

秋季オープンキャンパス

秋季オープンキャンパスは、10月9日（土）及び10日（日）の2日間、コロナウイルス感染予防のため、全てWeb・オンラインで実施しました。オープンキャンパス当日は、コロナウイルス第5波が急速に沈静化に向かっている状況下だったのですが、準備や参加者募集のため実施形式の判断を迫られたのは8月、まさに第5波が猛威を奮っていた時期で、やむなく来場形式をあきらめました。

秋季オンラインオープンキャンパス特別講義の様子▼▶



夏季と同様に大学ホームページ上に特別サイトを開設し、大学概要説明、キャンパスライフ紹介、各学科説明及び特別講義の録画動画を掲載しました。また、学科説明・特別講義、個別相談会を事前予約制でオンライン通話ソフト Zoom を使用して実施しました。

学科説明・特別講義は午前と午後実施し、2日間で計414名の参加がありました。個別相談会は、各学科、教職支援センター、キャリア支援センター、下宿の相談を実施し、2日間で計64名の参加がありました。

夏季・秋季を振り返って

来場形式で実施した夏季と比較し、Web・オンライン形式で実施した秋季の参加者数は残念ながら奮いませんでした。コロナウイルスの影響がまだなかった一昨年の夏季では2日間で3,000人以上の来場があったことと考えると、コロナウイルスで参加者数には非常に大きな影響を受けていることが分かります。

夏季オープンキャンパスで実施したアンケート自由記述からは、「雰囲気がよくてよかったです」「初めてオープンキャンパスに参加しましたが、一番良い印象でした」「とても優しい教授や学生の方々でした。入学したいという気持ちが高まりました」といった肯定的な声が殆どを占め、実際にキャンパス

の雰囲気や教員、学生と接することで受験への意欲が高まったことを確認することができます。しかし、コロナウイルス禍において、秋季のように今後も来場型のオープンキャンパスが実施できるとも限りません。いかにより多くの高校生に本学を知ってもらい、また、オープンキャンパスの代わりとなるような機会を創出し志望動機を高めてもらうか、大きな課題と考えます。

夏季オープンキャンパスは大変な猛暑の中、秋季オープンキャンパスはオンラインというイレギュラーな方法での実施でした。準備・運営に快くご尽力をいただいた教職員、学生スタッフ、広報委員会の皆様、ありがとうございました。（広報委員長 鈴木健大）

前期修了者卒業式

9月22日（水）、本部棟3階大会議室において、令和2年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は11名の学部卒業者のうち、8名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、藤田英典学長より一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



市民公開講座

湧水さんぽ

11月6日（土）に、地域交流研究センター自然共生研究部門、学校教育学科の内山美恵子教授による都留市十日市場・夏狩湧水群と忍野村忍野八海を見学する市民公開講座「湧水さんぽ」が、日本地下水学会市民コミュニケーション委員会の協力のもと開催されました。

当日は、富士急行線東桂駅から徒歩で菊地わさび園に集まり、地域交流研究センター長北垣憲仁教授からの挨拶、日程説明などの開催セレモニーを行いました。その後4班に分かれて太郎・次郎滝などの夏狩湧水群を地下水学会の説明とともに散策しました。また、午後からは忍野村の忍野八海にまで足を延ばし、出口池からの湧水なども学芸員と共に見学しました。

この見学会では日本地下水学会の会員の方々をはじめ、山梨県富士山科学研究所職員内山高氏の協力を得て、班分けをしたうえでの富士山麓湧水



太郎・次郎滝の観察

についての詳細な解説や、本学学校教育学科の理科教室の学生たちの地学小実験など、都留市や富士山周辺の地下水について広く造詣を深める講座となりました。

星空観察会

令和3年11月11日(木)午後6時15分から午後7時30分まで、本学自然科学棟S6地学実験室と屋上天文台施設を使い市民公開講座「星空観察会」が開催されました。

この講座は今年6月11日に学校教育学科内山美恵子教授と本学非常勤講師で国立天文台研究員の古荘玲子氏により開催された天文学講座「星空講演会」に続き行われたもので、今回は、代表的な惑星である月や木星、土星などを中心に、自然科学棟の天文台と屋上に設置した天体望遠鏡を使い観察・解説を行いました。



屋上天文台での天体望遠鏡を使った観察

当初は10月の開催を予定したものの新型コロナウイルス感染症の拡大状況が厳しく、11月の予備日に変更したうえ、感染防止対策のための定員も10名に絞っての開催となりましたが、開催当夜は、日没後の冷え込みは厳しかったものの観察するには絶好の星空となりました。

また、最後には11月19日の皆既月食にも触れ、参加された方々からは、非常に楽しかったため、季節ごとに開催してほしいなどのご意見も頂くなど小規模ながら好評な講座となりました。



月・木星・土星についての解説

英語であそぼう



ゲームやクイズをしている様子

11月13日(土)午前10時から地域交流研究センター主催の市民公開講座「小学生向け英語講座～英語であそぼう」が学校教育学科上原明子教授と同学科担当ゼミ学生により開催されました。

参加した小学生は1年生から6年生の全学年のため、教科科目として取り組んでいる5、6年生や低学年児童、特区のある学校などにより個別の



本学学生が個別で指導する様子

英語レベルに差があるため、ゲームやクイズなど本学学生が個別に指導するなどして全員が楽しみながら学べる講座となりました。本学学生にとっても学校教育学科の学生が中心であったため、教員としての指導経験として活かせるものとなりました。

子ども公開講座を開催

都 留文科大学地域交流研究センター主催の「子ども公開講座」が都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と連携して子どもたちが夏休み期間となった7月下旬の東京オリンピック連休に集中して5回に渡り開催しました。

初回は、東京オリンピック祝日の7月22日(木)に本学5号館201教室において、国文学科野中潤教授による「ユーチューバーになろう!」が開催され、中高学年児童を対象にして、iPadを使用して「むかし話」を音読するデジタル絵本をつくり、その動画をユーチューブに掲載し配信しました。



7月23日(金)のスポーツの日には本学体育館において中高学年児童を対象として、本学出身で元女子単距離オリンピック選手の佐野夢加特任講師による走り方教室「ロンドンオリンピック選手と走ろう!」を開催しました。走り方の指導の最後には、東京オリ



ピックの聖火トーチの実物を使ったリレーも行われました。

7月24日(土)には学校教育学科 竹下勝雄教授、青木宏希特任教授による「木を使って工作をしよう!」で、美術教室の学生たちの指導のもと中高学年の児童が複数の木切れを組み合わせ、造形物を創作したうえ、絵の具で色を塗りました。これらの木工造形物については、それぞれの子ども達がその説明をしてもらうなど発表会を実施しました。



7月25日(日)には前日と同じく学校教育学科美術教室の山本直紀特任教授、小俣英彦非常勤講師による「陶芸にチャレンジ」を開催し、同教室の学生と中高学年児童が共に板状の粘土を使って、お皿やカップなどの器を作成しました。



7月31日(土)には、自然科学棟の実験室において、学校教育学科 山田暢司特任教授による「ドライアイスのふしぎ」を開催しました。この講座は小学校1年生から4年生の低学年向けであったため理科教室の学生たちがアシスタントとして細かく指導しながらドライアイスを使った簡単な実験を行い理科の面白さを体験しました。



地 域交流研究センターではコロナ禍にある中においても、子ども向け公開講座をはじめとする各種公開講座が安心安全に開催できるよう検温や定員制限など各種感染防止対策も講じたうえで、地域の子どもたちが安心して参加できますよう努めてまいります。

夏季集中講座「現職教員教育講座」を開催しました

地域交流研究センターでは、7月26日（月）に本部棟3階大会議室において、「現職教員教育講座」を開催しました。本講座は、県総合教育センターの中堅教諭等資質向上研修で選択講座に指定されており、県内の小中学校・高校・支援学校から延べ81名の現職教員の方々が受講されました。



当講座は午前・午後の2部に分かれており、午前の部では学校教育学科 堤 英俊 准教授の『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』について、午後の部では教職支援センター 宮下 聡 特任教授が『道徳性の涵養』についてを、それぞれ担当され講義が行われました。

今回の開催にあたっては、学内の教室が新型コロナウイルス感染症対策のため例年使用する教室確保が困難となったため、通常教室としては使用しない本部棟の大会議室での開催となりました。会場での密を避ける座席配置や換気の徹底、マスク着用、手洗い消毒などを行い、受講者や担当講師も安心して受講できるよう感染防止対策を徹底したなかでの講座開催となりました。

教員免許状更新講習

本学では例年、教員免許状更新講習を開設しております。13年目を迎えた今年度は、6月19日から7月11日までの土曜日又は日曜日、計6日間にわたり13講習を開設し、延べ171名が受講しました。開設した講習は以下のとおりです。

領 域	講 習 の 名 称	講 師
【必修領域】	教育の最新事情	佐藤 隆 教授 中川 佳子 教授
【選択必修領域】	法令改正及び国の審議会の状況等	廣田 健 教授
	新学習指導要領に対応した外国語科及び外国語活動の授業づくり	上原 明子 教授
	学校における ICT 活用授業と情報モラル教育	日向 良和 准教授 吉岡 卓 特任准教授
【選択領域】	子どもの深い学びを支える算数科教材研究と授業づくり	新井 仁 准教授
	「主体的、対話的で深い学び」を具現化する小学校国語科授業	春日 由香 教授
	魅力的な教材開発や実験指導における実践的な取り組みについて	山田 暢司 特任教授
	社会科の新しい動向と教材作り	西尾 理 教授
	新学習指導要領実施に対応した中学校・高校における英語の授業づくり	萩原 一郎 特任教授
	1人1台の端末環境を整備する GIGA スクール構想は国語科の授業をどう変えるか	野中 潤 教授
	学級集団育成の理論とグループアプローチ	品田 笑子 非常勤講師
	地層と化石の観察	鷹野 貴雄 非常勤講師
	子どもたちの心と関わるために	早川 恵子 非常勤講師

Farming and Hunting

国際教育学科 ノルドストロム・ヨハン

When I moved from Tokyo to Tsuru in 2020, I asked myself two questions; what could I do in Tsuru that had not been possible while living in a big city, and in what small way might I be able to contribute to the community around me?

I realized that moving to the countryside would give me the opportunity pursue two different past-time interests, both separate, yet intimately connected: farming and hunting. I have many memories of helping my family with the fruit trees and various bushes that grew in our garden in Sweden. I had for a long time wanted to reconnect with that heritage. Although I had been fascinated by the act of hunting as a means of connecting to the wild and as a source of healthy sustenance, hunting was for me uncharted territory.

Living in Tsuru gave me a chance to do both, and I believe that they also allowed me to connect with the local community in a way that I would not otherwise have been able to. The local hunters are often also engaged in small scale farming, and I know



many who utilize their hunting skills to protect their crops from deer, boar and monkeys. One senior hunter told me that even though hunting is enjoyable in and of itself, as it brings us closer to nature and allows us to harvest healthy and sustainable meat, we must not forget that hunting also fulfils a vital function of protecting the livelihood of many rural communities that are relying on agriculture and forestry.

Although the number of active hunters in Japan is decreasing, during my time at Tsuru University, I have been glad to see several students show an interest in starting to hunt. In the future I hope that more young Japanese men and women will come to see hunting as not only a way to come closer to nature and to eat delicious game meat, but also as a way to contribute to one's local community.

ぶんだい堂

サバイバーズ・ギルト文学論
敗戦後を読む 震災後を生きる



野中 潤 著
2021年8月発行

◇野中 潤
国文学科 教授



国語教育と文学研究のデジタルシフト



野中 潤 著
2021年3月発行

◇野中 潤
国文学科 教授



公害スタディーズ



高田研、神長唯 他 著
2021年10月発行
ころから株式会社

◇高田 研 教授
神長 唯 教授



公式Instagramはじめました！
@tsuru_university

Follow us!



〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第147号 2021年12月17日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大 (委員長)・日向良和 (副委員長)・杉本光司 (担当副学長)・野口哲也・加藤めぐみ・山本芳美・山越英嗣・ノルドストロム・ヨハン・加藤 優・横瀬晴紀 (経営企画課長補佐)・安富博史 (企画広報担当)・天野麻由 (企画広報担当)